



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近世後期における和人の移住状況
Author(s)	麓, 慎一
Citation	北海道大學文學部紀要, 47(3), 1-31
Issue Date	1998-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33727
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(3)_PR1-31.pdf



近世後期における和人の移住状況

麓 慎 一

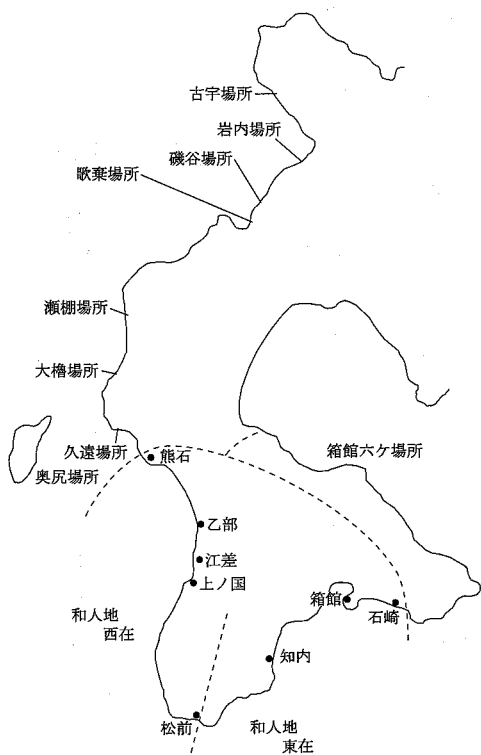
近世後期における北海道史研究において、「蝦夷地」への和人の流入は地域の構造変化を考える上で欠くことのできない研究分野である¹。従来この和人の「蝦夷地」への流入は、幕末における「和入地」と「蝦夷地」という近世の「蝦夷地」支配体制の崩壊を促進した大きな要因として捉えられてきた。しかし、「蝦夷地」への和人の流入それ自体を検討課題とした研究は極めて少ない。これまでは、北海道開拓記念館所蔵の『岩野家文書』を利用して歌棄への移住状況を海保嶺夫と小林真人が詳細に分析している。しかし、この分析も史料上の制約から、安政二年までの時期しか検討されていない。近世における「蝦夷地」支配体制崩壊の問題から言えば、「蝦夷地」と「和入地」の境界が崩壊する安政四年をどのように考えるかが一つの問題点であろう。

本稿の検討課題を確認する。検討課題は以下の二点である。第一に、従来検討されてきた歌棄場所を含めた八つの場所（奥尻・久遠・太櫓・瀬棚・歌棄・磯谷・岩内・古宇）を分析することによって、歌棄場所の分析を相対化し、蝦夷地西海岸の和人の流入状況の特質を明らかにする。第二に、「蝦夷地」支配体制崩壊の画期である安政四年を含め

近世後期における和人の移住状況

て慶応二年までの時期を検討することで、蝦夷地支配体制の崩壊と和人の「蝦夷地」への流入の関係を明確にする。分析を進める前に本稿が利用する史料について確認しておきたい。『丑年 遠別守都外七ヶ場所 永住并越年人別帳』（以下『人別帳』と略記する）は、奥尻・久遠・太櫓・瀬棚・歌棄・磯谷・岩内・古宇の八箇所の地域（各地域については図一を参照）の永住と越年の人別を慶応二（一八六六）年に調査した『人別帳』である。『人別帳』には、次の六つの項目が記載されている。①移住地（たとえば、歌棄場所のどの地域に居住してたかまで記されている）。②永

図 1



住人であるか出稼人であるかの区別。③移住の時期。④宗教。⑤出身地。⑥家族全員の名前と年齢。

記載は、詳細であり慶応二年時点における各地域の和人流入状況を理解することができる。

一 幕末における出稼人と永住人の関係について

最初に『人別帳』に記載されている八箇所の地域全体の出稼人と永住人の関係を検討することになろう。『人別帳』には、安政三年から慶応二年までの出稼人と永住人の軒数と人数が記載されている。これをまとめたのが表①である。表①中の合計によると、安政三年の時点では、八箇場所全体として七五二軒・三、六一五人の流入が確認できる。慶応二年では、出稼と永住の合計は軒数九三三軒・四、四〇七人である。安政三年と慶応二年を比較すると、八箇場所全体で軒数では一八一軒、人数では七九二人が増加している。安政三年から慶応二年間の増加傾向では、前年比の項を見ると、文久二年と元治一年にそれぞれ三〇〇人以上の増加となっている。一方、出稼と永住の関係では、安政五年の時点で出稼人が減少し、永住人が大幅に増加している。安政四年と安政五年と比較すると、合計ではそれぞれ七五五軒（三、六七二人）と七一八軒（三、五二一人）であり、やや減少している。安政四年の出稼と永住軒数は、七五一軒（三、六五三人）と四軒（一九人）であるのに対して、安政五年には三八五軒（二、九四八人）と三三三軒（一、四七三人）である。安政五年の時点で出稼人が永住人扱いに転換したことが分る。このような全体的な傾向を理解した上でそれぞれの地域の特徴を見ていくことにしよう。

表① 合計

合 計	出 稼	永 住	合 計	前年比
安 政 3 年	749軒 3,600	3軒 15	752軒 3,615	
安 政 4 年	751軒 3,653	4軒 19	755軒 3,672	3 57
安 政 5 年	385軒 2,048	333軒 1,473	718軒 3,521	-37 -151
安 政 6 年	388軒 2,238	335軒 1,480	723軒 3,718	5 197
万 延 1 年	438軒 2,308	300軒 1,457	738軒 3,765	15 47
文 久 1 年	469軒 2,244	285軒 1,448	754軒 3,692	16 -73
文 久 2 年	531軒 2,598	287軒 1,437	818軒 4,035	64 343
文 久 3 年	533軒 2,739	288軒 1,444	821軒 4,183	3 148
元 治 1 年	594軒 3,016	277軒 1,481	871軒 4,497	50 314
慶 応 1 年	243軒 1,003	634軒 3,300	877軒 4,303	6 -194
慶 応 2 年	300軒 1,115	633軒 3,292	933軒 4,407	56 104

表①～⑨の内、上段の数字は軒数である。下段の数字は人数である。
下段の人数の内、カッコ内の前者は男性であり、後者は女性である。

表② 奥尻場所

	出 稼	永 住	合 計
安 政 3 年	0軒 0	3軒 15(9・ 6)	3軒 15(9・ 6)
安 政 4 年	0軒 0	4軒 19(11・ 8)	4軒 19(11・ 8)
安 政 5 年	0軒 0	4軒 20(11・ 9)	4軒 20(11・ 9)
安 政 6 年	0軒 0	6軒 26(14・12)	6軒 26(14・12)
萬 延 1 年	0軒 0	6軒 28(15・13)	6軒 28(15・13)
文 久 1 年	0軒 0	7軒 32(17・15)	7軒 32(17・15)
文 久 2 年	0軒 0	10軒 41(22・19)	10軒 41(22・19)
文 久 3 年	0軒 0	11軒 44(24・20)	11軒 44(24・20)
元 治 1 年	0軒 0	13軒 53(30・23)	13軒 53(30・23)
慶 応 1 年	0軒 0	11軒 46(25・21)	11軒 46(25・21)
慶 応 2 年	0軒 0	11軒 46(25・21)	11軒 46(25・21)

第一に、奥尻場所の状況である。奥尻島の出稼人と永住人の関係をまとめたのが表②である。表②によれば、まず最初に判明するのは、奥尻場所への流入は、出稼人扱いの者がいない、という点である。奥尻島場所への人口の流入は、常に永住という資格で行われたことが判明する。その上で、安政三年から徐々に人口流入が増加し、元治元年の一三軒(五三人)が最高である。

近世後期における和人の移住状況

第二に、久遠場所の状況を検討する。表③によれば久遠場所は、奥尻場所と全く対照的な状況を示している。久遠場所では、慶応一年の一軒(三人)を例外とすると、総ての人が出稼人の資格で流入している。久遠場所の出稼人は、安政三年の二七軒(二三四人)から慶応二年の四九軒(三三一人)まで徐々に増加している。とりわけ、文久二年に

表③ 久遠場所

	出 稼	永 住	合 計
安政3年	27軒 134(72・ 62)	0軒 0	27軒 134(72・ 62)
安政4年	31軒 149(81・ 68)	0軒 0	31軒 149(81・ 68)
安政5年	31軒 150(81・ 69)	0軒 0	31軒 150(81・ 69)
安政6年	33軒 168(91・ 77)	0軒 0	33軒 168(91・ 77)
萬延1年	31軒 163(89・ 74)	0軒 0	31軒 163(89・ 74)
文久1年	32軒 167(91・ 76)	0軒 0	32軒 167(91・ 76)
文久2年	45軒 202(115・ 87)	0軒 0	45軒 202(115・ 87)
文久3年	45軒 206(115・ 91)	0軒 0	45軒 206(115・ 91)
元治1年	47軒 213(118・ 95)	0軒 0	47軒 213(118・ 95)
慶応1年	49軒 234(129・105)	1軒 3人(2・1)	50軒 237(131・106)
慶応2年	49軒 231(127・104)	0軒 0	49軒 231(127・104)

表④ 太櫓場所

	出 稼	永 住	合 計
安政3年	47軒 214(116・98)	0軒 0	47軒 214(116・98)
安政4年	53軒 247(133・114)	0軒 0	53軒 247(133・114)
安政5年	48軒 223(122・101)	0軒 0	48軒 223(122・101)
安政6年	48軒 222(122・100)	0軒 0	48軒 222(122・100)
萬延1年	46軒 205(114・91)	0軒 0	46軒 205(114・91)
文久1年	46軒 197(113・84)	0軒 0	46軒 197(113・84)
文久2年	45軒 213(123・90)	0軒 0	45軒 213(123・90)
文久3年	44軒 209(124・85)	0軒 0	44軒 209(124・85)
元治1年	43軒 209(121・88)	0軒 0	43軒 209(121・88)
慶応1年	41軒 194(115・79)	0軒 0	41軒 194(115・79)
慶応2年	41軒 193(114・79)	0軒 0	41軒 193(114・79)

は前年比で一三軒(三五人)の増加となっており、久遠場所の出稼人の増加の画期となっている。

第三の太櫓場所(表④)でも、永住人扱いの流入は無く、総て出稼人としての流入である。また、太櫓場所では、安政四年の五三軒(二四七人)を頂点に徐々に出稼軒数が減少し、慶応二年には、四一軒(一九三人)となっている。

近世後期における和人の移住状況

第四の瀬棚場所（表⑤）でも、永住人扱いの流入は無く、出稼人としての流入である。また、安政五年と安政六年は減少傾向にあるものの、その後は徐々に増加傾向にあり、慶応二年には六〇軒（二四三人）である。安政三年の数値と比較すると、二四軒（八九人）の増加である。

表⑤ 瀬棚場所

	出 稼	永 住	合 計
安政3年	36軒 154(84・ 70)	0軒 0	36軒 154(84・ 70)
安政4年	48軒 230(127・103)	0軒 0	48軒 230(127・103)
安政5年	41軒 187(107・ 81)	0軒 0	41軒 187(107・ 81)
安政6年	40軒 175(105・ 71)	0軒 0	40軒 175(105・ 71)
萬延1年	43軒 182(105・ 75)	0軒 0	43軒 182(105・ 75)
文久1年	46軒 202(118・ 84)	0軒 0	46軒 202(118・ 84)
文久2年	50軒 242(141・101)	0軒 0	50軒 242(141・101)
文久3年	56軒 255(149・107)	0軒 0	56軒 255(149・107)
元治1年	57軒 261(154・107)	0軒 0	57軒 261(154・107)
慶応1年	60軒 245(142・103)	0軒 0	60軒 245(142・103)
慶応2年	60軒 243(141・102)	0軒 0	60軒 243(141・102)

第五の歌棄場所（表⑥）では、安政二年から慶応二年まで増減を繰り返している。歌棄場所では、安政五年に永住人扱いが六八軒となつている点が注目される。これは、おそらく安政五年に新たな人口流入があつたのではなく、出稼人が、永住人の資格を取得したことが要因と推定される。そして、永住人は、安政五年の六八軒（三〇六人）以後、元治元年まで六八軒（三一四人）とほぼ増減なく推移している。また、出稼人と永住人の関係で付言すれば、慶応一年に、この関係が大きく変化している。元治一年には、出稼人が七一軒（三七三人）に対して永住人が六八軒（三一四人）と拮抗していたが、慶応一年には、出稼人が一四軒（六五人）であるのに対して、永住人が一三二軒（七〇九人）である。永住人の割合が極めて大きくなつていたのである。このように、歌棄場所では、出稼から永住への切り替え、という点で安政五年と慶応一年に画期を見出すことができる。また、全体としては安政三年から慶応二年までに三四軒（三〇九人）と大幅に増加している。

第六の磯谷場所（表⑦）でも、歌棄場所同様、安政五年になつて初めて永住人が登録されている。これも安政四年（二二四軒・七三二人）と安政五年（二一七軒・六九二人）の合計軒数がほぼ変化していないので、出稼人が永住人資格を取得したと推定される。また、安政五年に永住人が七八軒（四八六人）であり、この軒数は元治元年まで継続する。慶応一年に出稼人が前年の八五軒（四七六人）から二六軒（九五五人）に減少したのに対して、永住人は前年の七八軒（五一一人）から一四〇軒（八九四人）と大幅に増加している。磯谷場所も歌棄場所同様、出稼から永住への切り替えという点で安政五年と慶応一年に画期を見出すことができる。全体としては、安政三年から慶応二年までに四九軒（二六四人）の増加である。

第七の岩内場所（表⑧）も歌棄場所と磯谷場所同様、安政五年に永住人資格を取得し、慶応一年に、出稼人扱いが

表⑥ 歌楽場所

	出 稼	永 住	合 計
安 政 3 年	112軒 465(264・201)	0軒 0	112軒 465(264・201)
安 政 4 年	138軒 579(313・266)	0軒 0	138軒 579(313・266)
安 政 5 年	79軒 336(183・153)	68軒 306(176・130)	147軒 642(359・283)
安 政 6 年	64軒 333(218・115)	68軒 310(178・132)	132軒 643(396・247)
万 延 1 年	65軒 262(145・117)	68軒 308(177・131)	133軒 570(322・248)
文 久 1 年	60軒 223(119・104)	68軒 313(179・134)	128軒 536(298・238)
文 久 2 年	56軒 267(145・122)	68軒 297(169・128)	124軒 564(314・250)
文 久 3 年	60軒 311(187・124)	68軒 306(171・135)	128軒 617(358・259)
元 治 1 年	71軒 373(208・165)	68軒 314(174・140)	139軒 687(382・305)
慶 応 1 年	14軒 65(45・ 20)	132軒 709(395・314)	146軒 774(440・334)
慶 応 2 年	14軒 65(45・ 20)	132軒 709(395・314)	146軒 774(440・334)

近世後期における和人の移住状況

表⑦ 磯谷場所

	出 稼	永 住	合 計
安 政 3 年	117軒 680(426・254)	0軒 0	117軒 680(426・254)
安 政 4 年	114軒 722(431・291)	0軒 0	114軒 722(431・291)
安 政 5 年	39軒 206(114・ 92)	78軒 486(269・217)	117軒 692(383・309)
安 政 6 年	34軒 106(45・ 57)	78軒 483(268・215)	112軒 589(313・272)
万 延 1 年	41軒 204(115・ 89)	78軒 489(272・217)	119軒 693(387・306)
文 久 1 年	54軒 312(161・151)	78軒 498(275・223)	132軒 810(436・374)
文 久 2 年	71軒 394(217・175)	78軒 479(222・217)	149軒 873(439・392)
文 久 3 年	80軒 447(229・218)	78軒 489(229・220)	158軒 936(458・438)
元 治 1 年	85軒 476(262・214)	78軒 511(291・220)	163軒 987(553・434)
慶 応 1 年	26軒 95(43・ 52)	140軒 849(477・372)	166軒 944(520・424)
慶 応 2 年	26軒 95(43・ 52)	140軒 849(477・372)	166軒 944(520・424)

表⑧ 岩内場所

	出 稼	永 住	合 計
安政3年	294軒 1,452(824・628)	0軒 0	294軒 1,452(824・628)
安政4年	261軒 1,235(651・584)	0軒 0	261軒 1,235(651・584)
安政5年	122軒 750(394・316)	111軒 358(192・166)	233軒 1,108(586・482)
安政6年	141軒 1,004(568・436)	111軒 358(192・166)	252軒 1,362(760・602)
万延1年	182軒 1,073(620・453)	76軒 313(156・157)	258軒 1,386(776・610)
文久1年	154軒 823(448・375)	69軒 293(152・141)	223軒 1,116(600・516)
文久2年	180軒 962(524・439)	68軒 295(151・144)	248軒 1,257(675・583)
文久3年	174軒 966(540・426)	70軒 284(151・133)	244軒 1,250(691・559)
元治1年	196軒 1,101(619・482)	66軒 275(146・129)	262軒 1,376(765・611)
慶応1年	22軒 83(45・ 38)	240軒 1,117(571・546)	262軒 1,200(616・584)
慶応2年	56軒 164(92・ 72)	240軒 1,112(568・544)	296軒 1,276(660・616)

近世後期における和人の移住状況

大幅に減少し永住人が急増する傾向を確認することができる。合計軒数は、増減を繰り返している。安政三年と慶応

二年を比較すると軒数はほぼ同じであるが、人数では一七六人の減少となっている。これは、男性の減少に起因している。また、他の場所と比較して、出稼人と永住人の合計は最多である。安政三年から二〇〇軒の後半を維持しつづけている。

第八に、古宇場所（表⑨）である。古宇場所でも安政五年に永住人資格を取得している。また慶応一年には出稼扱いから永住扱いに切り替えた人が多い。安政三年と慶応二年を比較すると、四八軒（五〇一人）の増加である。とりわけ、文久元年に四〇軒近くが増加している。これは、出稼が四七軒増加したことによる。

以上、『人別帳』に記載されている安政三年から慶応二年までの各場所の出稼と永住の状況を検討した。次のようにまとめることができる。第一に、奥尻場所では、他の場所と異なり永住人資格で和人が流入している。第二に、奥尻場所と異なり久遠場所・太櫓場所・瀬棚場所では出稼資格で和人が流入している。第三に、歌棄場所・磯谷場所・岩内場所では安政五年に永住資格を取得し、慶応一年に再び永住資格を取得した人が増加するという傾向がある。永住と出稼の点から捉えると以上の三つに分類することができるであろう。

二 各場所の地域別流入状況

次に、各地域の出稼と永住の出身地域とその時期を検討し、それぞれの特徴を把握する。

表「1」を見ていただきたい。表「1」は、『人別帳』に記載されている地域全体の出稼人と永住人の出身地域とその時期をまとめたものである。数値は、出稼人と永住人の合計である。カッコ内は、出稼人の数である（永住人は、

近世後期における和人の移住状況

表⑨ 古宇場所

	出 稼	永 住	合 計
安 政 3 年	116軒 501(279・222)	0軒 0	116軒 501(279・222)
安 政 4 年	106軒 491(279・212)	0軒 0	106軒 491(279・212)
安 政 5 年	25軒 196(130・ 66)	72軒 303(161・142)	97軒 499(291・208)
安 政 6 年	28軒 230(139・ 91)	72軒 303(161・142)	100軒 533(300・233)
万 延 1 年	30軒 219(129・ 90)	72軒 319(173・146)	102軒 538(302・236)
文 久 1 年	77軒 320(182・138)	63軒 312(165・147)	140軒 632(347・285)
文 久 2 年	84軒 318(180・138)	63軒 325(174・151)	147軒 643(354・289)
文 久 3 年	74軒 345(187・158)	61軒 321(170・151)	135軒 666(357・309)
元 治 1 年	95軒 383(336・ 47)	52軒 328(167・161)	147軒 711(503・208)
慶 応 1 年	31軒 87(52・ 35)	110軒 576(299・277)	141軒 663(351・312)
慶 応 2 年	54軒 124(79・ 45)	110軒 576(298・278)	164軒 700(377・323)

記載されている数値からカッコ内の数値を引いた数である。

出身地域別で検討すると、不明を除いて七〇弱の地域から出稼・永住が流入している。また、箱館・松前・江差の三港と「蝦夷地」と「和人地」の境界である熊石や近隣の泊川が出稼人・永住人の大きな流出地域である。一方、年

表1

		落部	森	鷺木	白尻	川汲	尻岸内	湯川	小安	石崎	越前	稲館	大野	志苔	根内	上山	峠下	中野	有川	戸切	吉田	富川
安永3年	1774年																					
寛政8年	1796年																					
文化6年	1809年																					
文化7年	1810年																					
文化8年	1811年																					
文化9年	1812年																					
文化10年	1813年																					
文化11年	1814年																					
文化12年	1815年																					
文化13年	1816年																					
文化14年	1817年																					
文政1年	1818年																					
文政2年	1819年																					
文政3年	1820年																					
文政4年	1821年																					
文政5年	1822年																					
文政6年	1823年																					
文政7年	1824年																					
文政8年	1825年																					
文政9年	1826年																					
文政10年	1827年																					
文政11年	1828年																					
文政12年	1829年															1						
天保1年	1830年											1	1									
天保2年	1831年							1				4										
天保3年	1832年																					1
天保4年	1833年																					
天保5年	1834年			1							1											
天保6年	1835年																					
天保7年	1836年			6		1						2				1			2			
天保8年	1837年											2(1)							1			
天保9年	1838年								1(1)			2(1)						1(1)		1(1)		
天保10年	1839年								1													
天保11年	1840年										1	2								1		
天保12年	1841年											3(1)						1	1			
天保13年	1842年											1		1								
天保14年	1843年					1																
弘化1年	1844年											1										
弘化2年	1845年			2(1)				1				1(1)										
弘化3年	1846年			1	4(1)							2						2			1(1)	
弘化4年	1847年								1			1						1				1
嘉永1年	1848年											3										
嘉永2年	1849年																					
嘉永3年	1850年			1															1			
嘉永4年	1851年		1									1										
嘉永5年	1852年			1								1										
嘉永6年	1853年							1				2										
安政1年	1854年				1							2(1)										
安政2年	1855年											2	1(1)									
安政3年	1856年		1									1(1)										
安政4年	1857年											1										
安政5年	1858年									1(1)												
安政6年	1859年										1											
万延1年	1860年												2									
文久1年	1861年																					
文久2年	1862年																1					
文久3年	1863年											1(1)			1(1)							
元治1年	1864年											1										
慶応1年	1865年																		1(1)			
慶応2年	1866年																					
合 計		2	1	15(2)	1	1	1	3	3(1)	2(1)	2	40(7)	2(1)	1	1(1)	2	1	1	10(2)	1	1(1)	4(1)

近世後期における和人の移住状況

[illegible]

表1 (つづき)

		当別	三ツ谷	泉沢	札内	本谷	福島	宮崎	吉岡	荒谷	根森	大沢	上野	下野	松前	白神	茂草	清部	原口	石崎	木子	上国	北村	東船渡
安永3年	1774年																							
寛政8年	1796年																							
文化6年	1809年																							1(1)
文化7年	1810年																							
文化8年	1811年																							
文化9年	1812年																							
文化10年	1813年																							
文化11年	1814年							1																
文化12年	1815年																							
文化13年	1816年																							
文化14年	1817年																							2(2)
文政1年	1818年																							
文政2年	1819年																							
文政3年	1820年																							
文政4年	1821年																							
文政5年	1822年																							
文政6年	1823年																							
文政7年	1824年																							1(1)
文政8年	1825年																						1(1)	
文政9年	1826年				1(1)																			
文政10年	1827年																							
文政11年	1828年														1(1)									
文政12年	1829年																							1(1)
天保1年	1830年																							1(1)
天保2年	1831年															1								1(1)
天保3年	1832年																							1
天保4年	1833年																							1
天保5年	1834年																							2
天保6年	1835年				1(1)																			4(2)
天保7年	1836年		1									5				5								
天保8年	1837年																							
天保9年	1838年		1	1					1							1							1(1)	
天保10年	1839年											1				2								1(1)
天保11年	1840年																							
天保12年	1841年								1	1		1(1)			2(2)								1(1)	5(1)
天保13年	1842年					1					1		1(1)											2
天保14年	1843年										1													2(1)
弘化1年	1844年														1(1)									1(1)
弘化2年	1845年																							
弘化3年	1846年		4(1)			2						2			13(3)									4(3)
弘化4年	1847年									1														2
嘉永1年	1848年		1(1)		1(1)											2(1)								3(1)
嘉永2年	1849年															1								1(1)
嘉永3年	1850年			1				1	1							1								2(1)
嘉永4年	1851年											1		1(1)				1						4
嘉永5年	1852年																1(1)							3(1)
嘉永6年	1853年											1				1								5(2)
安政1年	1854年									1						1						1(1)		6(5)
安政2年	1855年		1(1)																					2
安政3年	1856年		1			1				1	1			1										2(1)
安政4年	1857年															1								2(1)
安政5年	1858年																							5(3)
安政6年	1859年																			1	1(1)			1(1)
万延1年	1860年									1						1(1)								2(1)
文久1年	1861年									1(1)						1							1(1)	1(1)
文久2年	1862年															3(2)	1(1)							3(2)
文久3年	1863年															2(1)								4(4)
元治1年	1864年															2(1)	1(1)							
慶応1年	1865年			1(1)						1(1)						1(1)							2(2)	2(2)
慶応2年	1866年															1(1)								
合 計			18(3)	3(1)	3(3)	2	2	2	3	7(2)	1	12	2(1)	3(3)	33(15)	2(2)	1(1)	1	1	1(1)	1(1)	4(3)	3(3)	80(43)

近世後期における和人の移住状況

代別では、安永三（一七七四）年の熊石からの永住が最初である。弘化三（一八四六）年の三八人が最も多い年である。全体的な動向を見たところで各地域の出稼人・永住人の状況を考察することになろう。

奥尻場所（表「2」）の特徴は、第一に、安永三年という極めて早い時期に永住人が熊石から入ってきたという点である。安政四年の永住人扱が許可される以前から奥尻場所では永住人として流入していたのである。また、時期的には、安政四年以後に、全体の一一軒中八軒が熊石から流入してきている。一方、地域的な編成としては、蝦夷地と和人の境界である熊石から六軒と、半数以上を占めている。

久遠場所（表「3」）では、文政九（一八二六）年以後、徐々に流入が続き、幕末には急激に増加している。地域的

表2 奥尻場所

		宮歌	松前	原口	熊石	津軽	秋田	合計
安永3年	1774年				2			2
寛政8年	1796年							
文化6年	1809年							
文化7年	1810年							
文化8年	1811年							
文化9年	1812年							
文化10年	1813年							
文化11年	1814年	1						1
文化12年	1815年							
文化13年	1816年							
文化14年	1817年							
文政1年	1818年							
文政2年	1819年							
文政3年	1820年							
文政4年	1821年							
文政5年	1822年							
文政6年	1823年							
文政7年	1824年							
文政8年	1825年							
文政9年	1826年							
文政10年	1827年							
文政11年	1828年							
文政12年	1829年							
天保1年	1830年							
天保2年	1831年							
天保3年	1832年							
天保4年	1833年							
天保5年	1834年							
天保6年	1835年							
天保7年	1836年							
天保8年	1837年							
天保9年	1838年							
天保10年	1839年							
天保11年	1840年							
天保12年	1841年							
天保13年	1842年							
天保14年	1843年							
弘化1年	1844年							
弘化2年	1845年							
弘化3年	1846年							
弘化4年	1847年							
嘉永1年	1848年							
嘉永2年	1849年							
嘉永3年	1850年							
嘉永4年	1851年							
嘉永5年	1852年							
嘉永6年	1853年							
安政1年	1854年							
安政2年	1855年							
安政3年	1856年							
安政4年	1857年				1			1
安政5年	1858年							
安政6年	1859年			1	1			2
万延1年	1860年							
文久1年	1861年					1		1
文久2年	1862年				2			2
文久3年	1863年							
元治1年	1864年		1				1	2
慶応1年	1865年							
慶応2年	1866年							
合計		1	1	1	6	1	1	11

表3 久遠場所

		箱館	有川	札河	松前	茂草	木子	上国	東江差	田沢	乙部	相洞内	泊川	熊石	合計
安永3年	1774年														
寛政8年	1796年														
文化6年	1809年														
文化7年	1810年														
文化8年	1811年														
文化9年	1812年														
文化10年	1813年														
文化11年	1814年														
文化12年	1815年														
文化13年	1816年														
文化14年	1817年														
文政1年	1818年														
文政2年	1819年														
文政3年	1820年														
文政4年	1821年														
文政5年	1822年														
文政6年	1823年														
文政7年	1824年														
文政8年	1825年														
文政9年	1826年			1(1)											1(1)
文政10年	1827年														
文政11年	1828年				1(1)									1(1)	2(2)
文政12年	1829年														
天保1年	1830年										1(1)				1(1)
天保2年	1831年													1(1)	1(1)
天保3年	1832年														
天保4年	1833年														
天保5年	1834年														
天保6年	1835年			1(1)											1(1)
天保7年	1836年						1(1)	1(1)							
天保8年	1837年	1(1)													1(1)
天保9年	1838年		1(1)											1(1)	2(2)
天保10年	1839年														
天保11年	1840年														
天保12年	1841年														
天保13年	1842年														
天保14年	1843年														
弘化1年	1844年														
弘化2年	1845年														
弘化3年	1846年				2(2)				1(1)					1(1)	4(4)
弘化4年	1847年														
嘉永1年	1848年			1(1)	1(1)									1(1)	3(3)
嘉永2年	1849年									1(1)			1(1)		2(2)
嘉永3年	1850年													1(1)	1(1)
嘉永4年	1851年													1(1)	1(1)
嘉永5年	1852年						1(1)		1(1)						2(2)
嘉永6年	1853年														
安政1年	1854年							1(1)							1(1)
安政2年	1855年														
安政3年	1856年														
安政4年	1857年												1(1)		1(1)
安政5年	1858年													2(2)	2(2)
安政6年	1859年											1(1)			1(1)
万延1年	1860年								1(1)						1(1)
文久1年	1861年							1(1)							1(1)
文久2年	1862年								1(1)				1(1)	2(2)	4(4)
文久3年	1863年											1(1)			1(1)
元治1年	1864年											1(1)	2(2)		3(3)
慶応1年	1865年				1(1)			1(1)	1(1)				6(6)	1(1)	10(10)
慶応2年	1866年														
合計		1(1)	1(1)	3(3)	5(5)	1(1)	1(1)	2(2)	5(5)	1(1)	1(1)	3(3)	11(11)	13(13)	48(48)

表4 太櫓場所

		三ツ谷	松前	北村	東館	乙部	箱館内	泊川	熊石	合計
安永3年	1774年									
寛政8年	1796年									
文化6年	1809年			1(1)						
文化7年	1810年									
文化8年	1811年									
文化9年	1812年									
文化10年	1813年									
文化11年	1814年									
文化12年	1815年									
文化13年	1816年									
文化14年	1817年									
文政1年	1818年									
文政2年	1819年									
文政3年	1820年									
文政4年	1821年									
文政5年	1822年									
文政6年	1823年									
文政7年	1824年									
文政8年	1825年			1(1)						1(1)
文政9年	1826年							1(1)		1(1)
文政10年	1827年									
文政11年	1828年									
文政12年	1829年									
天保1年	1830年							1(1)		1(1)
天保2年	1831年			1(1)					1(1)	2(2)
天保3年	1832年									
天保4年	1833年						1(1)			1(1)
天保5年	1834年							1(1)		1(1)
天保6年	1835年				2(2)				1(1)	3(3)
天保7年	1836年						1(1)			1(1)
天保8年	1837年									
天保9年	1838年			1(1)						1(1)
天保10年	1839年			1(1)	1(1)				1(1)	3(3)
天保11年	1840年							1(1)		1(1)
天保12年	1841年			1(1)		1(1)	2(2)			4(4)
天保13年	1842年					1(1)				1(1)
天保14年	1843年									
弘化1年	1844年								2(2)	2(2)
弘化2年	1845年									
弘化3年	1846年							1(1)		1(1)
弘化4年	1847年									
嘉永1年	1848年							1(1)	1(1)	2(2)
嘉永2年	1849年									
嘉永3年	1850年			1(1)						1(1)
嘉永4年	1851年									
嘉永5年	1852年									
嘉永6年	1853年					1(1)	1(1)			2(2)
安政1年	1854年			1(1)	1(1)					2(2)
安政2年	1855年	1(1)							1(1)	2(2)
安政3年	1856年			1(1)						1(1)
安政4年	1857年									
安政5年	1858年				1(1)					1(1)
安政6年	1859年									
万延1年	1860年		1(1)					1(1)		2(2)
文久1年	1861年									
文久2年	1862年									
文久3年	1863年				1(1)	1(1)				2(2)
元治1年	1864年									
慶応1年	1865年									
慶応2年	1866年									
合計		1(1)	1(1)	3(3)	9(9)	6(6)	5(5)	7(7)	7(7)	39(39)

近世後期における和人の移住状況

には、明確な特徴がある。熊石・泊川・江差のからの流入が多く、箱館以东からの流入は見られない。とりわけ、熊石と泊川からは、慶応一年の時点で一〇軒以上の流入がある。またこれらの流入が、総て永住人ではなく、出稼人の資格である点も確認しておきたい。

太櫓場所(表「4」)でも、安政二年の三ツ谷の一軒と万延一年の松前からの出稼人の流入を除外すると、江差とその周辺の村からの流入である。箱館やそれ以东からの流入は見られない。具体的には、江差(九軒)、乙部(六軒)、

相沼内（五軒）、泊川（七軒）、熊石（七軒）である。この数値によると、太櫓場所への出稼人もかなり限定的な地域から流入していたことが分る。

瀬棚場所（表「5」）でも、江差とその周辺から来ている出稼人が多いことが分る。また、江差（一八軒）・泊川（一四軒）の地域からの出稼人が多いのは、太櫓場所（表「4」）と同様である。一方で、太櫓場所では見られなかった蚊柱村や相沼村からの流入もある。また、これまでの奥尻場所（表「2」）・久遠場所（表「3」）・太櫓場所（表「4」）と瀬棚場所（表「5」）が異なるのは、南部（二軒）や津軽（一軒）など少数ながら本州からの出稼人がいることであろう。

歌棄場所（表「6」）の特徴は、これまでの地域と異なり江差とその周辺意外の地域からの流入が極めて多いことである。江差から永住が一六軒、出稼が三軒と多いものの、太櫓場所や瀬棚場所でも多かつた泊川からの永住は一軒にとどまっている。一方、江差とその周辺地域意外では、松前と箱館周辺からの流入が多いことが特徴であろう。また、落部（永住二軒）・鷲木（永住六軒）といったいわゆる箱館六ヶ場所からの流入が見られる点もこの地域の特徴であろう。道外では南部（永住七軒）・津軽（永住二軒）に加えて、庄内（永住一軒）や新潟（出稼一軒）からの流入も見られる。また、時期的には天保七（一八三六）年の二五軒や弘化三（一八四六）年の一五軒など、かなり限られた時期に多くの流入があった。

磯谷場所（表「7」）の特徴は、江差とその周辺からの流入が多いことと、箱館からの流入が多いことであろう。特に、江差から出稼が七軒、永住が三七軒であり合計すると四四軒となり他の地域を圧倒している。またそれに次いで熊石からの流入も多い。三港の内、松前からの流入が少ないことも指摘しておきたい。北海道以外からの流入として

近世後期における和人の移住状況

は南部から合計一〇軒が流入している。時期的には、天保一年後に流入が始っており、比較的他の地域とくらべると新しい。流入の最盛期は、天保後期から嘉永期である。

岩内場所（表「8」）では、これまで流入の中心であった江差やその周辺からの流入は見られない（江差・相沼内の合わせて二軒である）。松前とその周辺の上及部と下及部から五軒の出稼がある。一方、幕末に、南部・津軽・仙台・などの本州地域からの流入が目立っている。時期的には、天保一二（一八四二）年の上及部と松前が最初であり、流入の時期が遅い点が特徴であろう。

古宇場所（表「9」）は、幕末における本州地域からの流入が多いことが特徴であろう。とりわけ、羽州からの出稼が多い。流入時期が天保一年とかなり新しく、流入もほとんどが、安政四年以後である。古宇場所に関しては、箱館奉行の「蝦夷地」への流入促進政策の成果が見られたと推定できる。

まとめ

従来の研究では、安政四年における「蝦夷地」への永住許可政策は、蝦夷地への二八取り漁民の流入におされて箱館奉行が許可するようになったと言われている。しかし、本稿が検討した地域について言えば、安政四年以前に永住人として流入していた奥尻場所を除けば、安政五年に前年度比二二九軒の永住軒数増加（表①の安政五年の永住軒数三三三軒から安政四年の永住軒数四軒「これは、奥尻場所の永住軒数である」を差し引く）があつたが、これは、出稼人が永住人扱いとなったことにその要因があり、これらの地域への流入それ自体が増加したとは評価できない。な

表5 瀬棚場所

		箱館	大野	荒谷	松前	奥平	伏木戸	乙部	三谷	蚊柱	根淵内	泊川	熊石	南部	津軽	能登	不明	合計
安永3年	1774年																	
寛政8年	1796年												1(1)					1(1)
文化6年	1809年																	
文化7年	1810年																	
文化8年	1811年																	
文化9年	1812年																	
文化10年	1813年																	
文化11年	1814年																	
文化12年	1815年																	
文化13年	1816年					2(2)												2(2)
文化14年	1817年																	
文政1年	1818年																	
文政2年	1819年																	
文政3年	1820年																	
文政4年	1821年																	
文政5年	1822年																	
文政6年	1823年																	
文政7年	1824年					1(1)												1(1)
文政8年	1825年																	
文政9年	1826年																	
文政10年	1827年																	
文政11年	1828年																	
文政12年	1829年					1(1)												1(1)
天保1年	1830年					1(1)												1(1)
天保2年	1831年																	
天保3年	1832年																	
天保4年	1833年											1(1)						1(1)
天保5年	1834年											1(1)						1(1)
天保6年	1835年																	
天保7年	1836年							2(2)				2(2)						4(4)
天保8年	1837年																	
天保9年	1838年																	
天保10年	1839年																	
天保11年	1840年																	
天保12年	1841年				1(1)	1(1)							1(1)					3(3)
天保13年	1842年											1(1)						1(1)
天保14年	1843年					1(1)												1(1)
弘化1年	1844年				1(1)													1(1)
弘化2年	1845年													1(1)				1(1)
弘化3年	1846年					1(1)							3(3)					4(4)
弘化4年	1847年								1(1)								1(1)	2(2)
嘉永1年	1848年											1(1)						1(1)
嘉永2年	1849年					1(1)						1(1)					1(1)	3(3)
嘉永3年	1850年																1(1)	1(1)
嘉永4年	1851年																	
嘉永5年	1852年																	
嘉永6年	1853年					1(1)	1(1)					2(2)						4(4)
安政1年	1854年					4(4)						1(1)		1(1)	1(1)			7(7)
安政2年	1855年		1(1)							2(2)		1(1)				1(1)		5(5)
安政3年	1856年	1(1)						1(1)										2(2)
安政4年	1857年					1(1)												1(1)
安政5年	1858年										1(1)							1(1)
安政6年	1859年																	
万延1年	1860年																	
文久1年	1861年												1(1)					1(1)
文久2年	1862年					1(1)												1(1)
文久3年	1863年					2(2)						2(2)						4(4)
元治1年	1864年										1(1)	1(1)						2(2)
慶応1年	1865年			1(1)		1(1)												2(2)
慶応2年	1866年																	
合計		1(1)	1(1)	1(1)	3(3)	18(18)	1(1)	1(1)	2(2)	3(3)	2(2)	14(14)	6(6)	2(2)	1(1)	1(1)	3(3)	60(60)

近世後期における和人の移住状況

[illegible]

表6 歌楽場所

		落部	森	鷺木	川汲	湯川	鏡池	箱館	志吾	柳田	大野	上山	峠下	中野澤	有川	戸切	吉田	富川	三ツ谷	泉沢	木古内
安永3年	1774年																				
寛政8年	1796年																				
文化6年	1809年																				
文化7年	1810年																				
文化8年	1811年																				
文化9年	1812年																				
文化10年	1813年																				
文化11年	1814年																				
文化12年	1815年																				
文化13年	1816年																				
文化14年	1817年																				
文政1年	1818年																				
文政2年	1819年																				
文政3年	1820年																				
文政4年	1821年																				
文政5年	1822年																				
文政6年	1823年																				
文政7年	1824年																				
文政8年	1825年																				
文政9年	1826年																				
文政10年	1827年																				
文政11年	1828年																				
文政12年	1829年											1									
天保1年	1830年										1										
天保2年	1831年																				
天保3年	1832年																				
天保4年	1833年																				
天保5年	1834年																				
天保6年	1835年																				
天保7年	1836年			5	1			1				1			2				1		
天保8年	1837年														1						
天保9年	1838年							1(1)									1(1)			1	
天保10年	1839年																				
天保11年	1840年																1				
天保12年	1841年													1							
天保13年	1842年							1	1												
天保14年	1843年																				
弘化1年	1844年																				
弘化2年	1845年					1															
弘化3年	1846年		1	1											2				3		2
弘化4年	1847年														1			1			
嘉永1年	1848年							1													
嘉永2年	1849年																				
嘉永3年	1850年														1						
嘉永4年	1851年	1						1													
嘉永5年	1852年																				
嘉永6年	1853年							2													
安政1年	1854年																	1			
安政2年	1855年							1													
安政3年	1856年	1																			
安政4年	1857年					1(1)															
安政5年	1858年																				
安政6年	1859年																				
万延1年	1860年							2													
文久1年	1861年																				
文久2年	1862年												1								
文久3年	1863年					1(1)															
元治1年	1864年							2													
慶応1年	1865年									1(1)					1(1)					1(1)	
慶応2年	1866年																				
合 計		2	1	6	1	1	1(1)	13(2)	1	1(1)	1	2	1	1	8(1)	1	1(1)	2	4	2(1)	2

近世後期における和人の移住状況

[illegible]

表7 磯谷場所

		鷺木	白尻	尻岸内	湯川	小安	石崎	箕田沢	箱館	有川	富川	当別	三ツ谷	泉沢	宮歌	吉岡	根森	上及部
安永3年	1774年																	
寛政8年	1796年																	
文化6年	1809年																	
文化7年	1810年																	
文化8年	1811年																	
文化9年	1812年																	
文化10年	1813年																	
文化11年	1814年																	
文化12年	1815年																	
文化13年	1816年																	
文化14年	1817年																	
文政1年	1818年																	
文政2年	1819年																	
文政3年	1820年																	
文政4年	1821年																	
文政5年	1822年																	
文政6年	1823年																	
文政7年	1824年																	
文政8年	1825年																	
文政9年	1826年																	
文政10年	1827年																	
文政11年	1828年																	
文政12年	1829年																	
天保1年	1830年								1									
天保2年	1831年				1				4									
天保3年	1832年										1							
天保4年	1833年																	
天保5年	1834年	1						1										
天保6年	1835年																	
天保7年	1836年	1							1									
天保8年	1837年								1									
天保9年	1838年					1(1)			1			1						
天保10年	1839年					1												
天保11年	1840年							1	2									
天保12年	1841年								3(1)	1						1		
天保13年	1842年																	
天保14年	1843年			1														
弘化1年	1844年								1									
弘化2年	1845年	2(1)																
弘化3年	1846年	3(1)							2		1(1)		1(1)					
弘化4年	1847年					1			1									
嘉永1年	1848年								2				1(1)					
嘉永2年	1849年																	
嘉永3年	1850年	1												1	1	1		
嘉永4年	1851年																	
嘉永5年	1852年	1							1									
嘉永6年	1853年				1													
安政1年	1854年		1						2(1)									
安政2年	1855年								1									
安政3年	1856年											1					1	1
安政4年	1857年								1									
安政5年	1858年																	
安政6年	1859年						1											
万延1年	1860年																	
文久1年	1861年																	
文久2年	1862年																	
文久3年	1863年																	
元治1年	1864年																	
慶応1年	1865年																	
慶応2年	1866年																	
合 計		9	1	1	2	3(1)	1	2	24(2)	1	2(1)	1	3(2)	1	1	2	1	1

表8 岩内場所

		上及部	下及部	松前	上国	奥江笠	相沼内	南部	津軽	仙台	羽州	越後	佐渡	加賀	秋田	能登	合計
安永3年	1774年																
寛政8年	1796年																
文化6年	1809年																
文化7年	1810年																
文化8年	1811年																
文化9年	1812年																
文化10年	1813年																
文化11年	1814年																
文化12年	1815年																
文化13年	1816年																
文化14年	1817年																
文政1年	1818年																
文政2年	1819年																
文政3年	1820年																
文政4年	1821年																
文政5年	1822年																
文政6年	1823年																
文政7年	1824年																
文政8年	1825年																
文政9年	1826年																
文政10年	1827年																
文政11年	1828年																
文政12年	1829年																
天保1年	1830年																
天保2年	1831年																
天保3年	1832年																
天保4年	1833年																
天保5年	1834年																
天保6年	1835年																
天保7年	1836年																
天保8年	1837年																
天保9年	1838年																
天保10年	1839年																
天保11年	1840年																
天保12年	1841年	1(1)		1(1)													2(2)
天保13年	1842年		1(1)														1(1)
天保14年	1843年																
弘化1年	1844年																
弘化2年	1845年																
弘化3年	1846年			1(1)				1(1)									2(2)
弘化4年	1847年																
嘉永1年	1848年																
嘉永2年	1849年																
嘉永3年	1850年																
嘉永4年	1851年		1(1)														1(1)
嘉永5年	1852年																
嘉永6年	1853年						1(1)										1(1)
安政1年	1854年																
安政2年	1855年																
安政3年	1856年																
安政4年	1857年																
安政5年	1858年																
安政6年	1859年																
万延1年	1860年																
文久1年	1861年																
文久2年	1862年					1(1)							1(1)				2(2)
文久3年	1863年													1(1)			2(2)
元治1年	1864年									1(1)							1(1)
慶応1年	1865年				1(1)			1(1)	2(2)		1(1)				1(1)	3(3)	9(9)
慶応2年	1866年																
合 計		1(1)	2(2)	2(2)	1(1)	1(1)	1(1)	2(2)	2(2)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	3(3)	21(21)

近世後期における和人の移住状況

表9 古宇場所

		石崎	箱館	松前	白神	石崎	敷島	泊り	厚沢部	相沢内	熊石	長万部	南部	津軽	羽州	秋田	合計
安永3年	1774年																
寛政8年	1796年																
文化6年	1809年																
文化7年	1810年																
文化8年	1811年																
文化9年	1812年																
文化10年	1813年																
文化11年	1814年																
文化12年	1815年																
文化13年	1816年																
文化14年	1817年																
文政1年	1818年																
文政2年	1819年																
文政3年	1820年																
文政4年	1821年																
文政5年	1822年																
文政6年	1823年																
文政7年	1824年																
文政8年	1825年																
文政9年	1826年																
文政10年	1827年																
文政11年	1828年																
文政12年	1829年																
天保1年	1830年																
天保2年	1831年																
天保3年	1832年																
天保4年	1833年																
天保5年	1834年																
天保6年	1835年																
天保7年	1836年																
天保8年	1837年																
天保9年	1838年																
天保10年	1839年																
天保11年	1840年														1(1)		1(1)
天保12年	1841年																
天保13年	1842年																
天保14年	1843年																
弘化1年	1844年																
弘化2年	1845年		1(1)														1(1)
弘化3年	1846年																
弘化4年	1847年																
嘉永1年	1848年																
嘉永2年	1849年																
嘉永3年	1850年																
嘉永4年	1851年																
嘉永5年	1852年																
嘉永6年	1853年																
安政1年	1854年																
安政2年	1855年																
安政3年	1856年														1(1)		1(1)
安政4年	1857年														1(1)		1(1)
安政5年	1858年	1(1)															1(1)
安政6年	1859年				1(1)	1(1)					1(1)						3(3)
万延1年	1860年							1(1)									1(1)
文久1年	1861年										1(1)						5(5)
文久2年	1862年			1(1)		1(1)			2(2)						4(4)		
文久3年	1863年		1(1)			1(1)		1(1)							1(1)		4(4)
元治1年	1864年			1(1)					1(1)				1(1)	1(1)	3(3)	1(1)	8(8)
慶応1年	1865年						1(1)						1(1)		1(1)		3(3)
慶応2年	1866年																
合計		1(1)	1(1)	1(1)	2(2)	1(1)	2(2)	1(1)	2(2)	1(1)	1(1)	1(1)	2(2)	3(3)	1(1)	1(1)	31(31)

近世後期における和人の移住状況

ぜなら、合計全体が増加していないからである(表①の安政四年と安政五年の合計を比較する)。したがって、箱館奉行による安政四年の永住の許可が二八取り漁民などの「蝦夷地」への和人の流入の促進を意図したものであったとしても、久遠場所から古宇場所までの地域ではその影響が直ちにあったとは言えない。古宇場所より北方の地域における出稼・永住の流入状況を検討することが今後の課題の一つとなろう。表①で検討したように、出稼・永住の増加という点では、文久二年(六四軒・三四三人)と元治一年(五〇軒・三一四人)に顕著な増加傾向を確認することができる。

地域別では次の点を指摘することができるであろう。まず和人地西在に近い場所ほど、江差とその周辺の地域からの流入が多いことである。出身地域別で見ると、久遠場所では江差と熊石、太櫓場所では江差・熊石・泊川、瀬棚場所では江差・泊川が中心地である。このような状況が変化するのが歌棄場所であろう。歌棄場所になると、江差周辺のみならず松前周辺や箱館周辺(箱館六ヶ場所も含め)からの流入が多くなるのである。磯谷場所では、松前周辺からの流入が少くなって箱館周辺と江差周辺に二分化する。岩内場所周辺では、松前と本州地域に分化している。古宇場所になると本州地域からの流入が圧倒的に多くなるのである。このように、西蝦夷地の内、南部ほど江差周辺との関係が強く、北部に比べいくほど江差以外の地域との関係が強くなり、岩内場所や古宇場所では本州との関係が強くなるのである。また、一般的には、南部の場所ほど出稼人や永住人の流入時機が早いのが特徴である。奥尻場所は安永三(一七七四)年、久遠場所は文政九(一八二六)年、久遠場所は文政八(一八二五)年、瀬棚場所は文化一三(一八一六)年、歌棄場所は文政一二(一八二九)年、磯谷場所は文政一一(一八二八)年、岩内場所は天保一二(一八四一)年、古宇場所は天保一一(一八四〇)年である。

注

- 1 本稿で利用する「蝦夷地」とは、北海道の内、近世に定められていた和人の居住地である「和人地」（東は石崎・西は熊石）を除いた地域を意味する。
- 2 海保嶺夫「蝦夷地『異域』体制解体の前提」『地方史研究』三六卷三号、一九八六年六月。
- 3 小林真人「蝦夷地における和人の定住過程について」『北海道開拓記念館調査報告』二五号、一九八六年三月。
- 4 『人別帳』には、各地域のアイヌ人別も含まれているが本稿では検討対象としない。